

第4回 石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ 議事要旨

日 時：平成 27 年 12 月 21 日（月） 13:30～15:30

場 所：南幌町ふるさと物産館「ビューロー」3階会議室

出席者：矢部 和夫（札幌市立大学 大学院 デザイン研究科 教授）座長

尾暮 靖志（南幌町 都市整備課 参事）

木村 浩二（雪印種苗株式会社 環境緑化部 緑化事業課 自然環境グループ）

錦織 正智（北海道立総合研究機構 森林研究本部 緑化樹センター 研究グループ
主査）

西村 誠一（農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター 生産研
究領域 主任研究員）

橋本 雄太（空知総合振興局 地域政策部 主幹）

濱田 暁生（NPO法人 ふらっと南幌 代表理事）

船木 淳悟（寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 寒地河川チーム 上席研究員）

平井 康幸（寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 水環境保全チーム 上席研究
員）

松田 泰明（寒地土木研究所 特別研究監付 地域景観ユニット 総括主任研究員）

梶井 正将（札幌開発建設部 河川計画課長）

岡部 啓二（札幌開発建設部 江別河川事務所長）（以上 12 名）

欠席者：浅野 茂（南幌町 教育委員会 生涯学習課 社会教育グループ リーダー）

小林 重雄（南幌町 郷土史研究会 副会長）（以上 2 名）

敬称略

1. 開会

2. 議事

（1）石狩川下流幌向地区自然再生のこれまでの取り組み経緯について

（松田氏）

調査動線とはどのようなイメージか。

（矢部座長）

調査動線は板を敷く程度の作業用の動線のことであり、景観を考えた動線という意味ではないので、（資料の）2 ポツ目は不要である。

（2）石狩川下流幌向地区自然再生の検討事項について

1）遮水整備の実施方法および幌向再生地の管理について

（矢部座長）

今年度の遮水試験結果では、No2 観測孔の夏至前後（6～7 月）の水位は、地盤高-0.4m であるが、来年度遮水範囲を延長した場合、水位低下が少なくなることは期待できるか。

（事務局）

遮水範囲を延長すれば、最低水位は現況より上昇すると考えられる。来年度のモニタ

リングで水位上昇量が不足するようであれば、(来年度施工予定の) 一面だけでなく、横方向の遮水を検討する。

(濱田氏)

No52 観測孔は昨年度と水位変化が無かったということだが、今年度の結果を踏まえて改善して本施工に進むという理解で良いか。遮水盛土を行うことで、幌向再生地の全面が湿生植物にとって良い環境になると考えていたが違うのか。

(事務局)

No52 観測孔は水面勾配があるため、No2 観測孔より遮水効果が発現しにくい状況となっている。このため、地表面を鋤き取ることで地表面水位を維持できると考えている。

(榊井氏)

No52 観測の水位が標高で高く見える。他の箇所も含めて、中央部の水位が高いのであれば、横方向からの流出が考えられるので、横方向の遮水の検討の参考になるので、しっかりデータを整理していただきたい。

(平井氏)

地下水位の観測には時間がかかるので、現地観測と地下水シミュレーションを併用して分析すれば効率的ではないか。

(事務局)

過去に地下水シミュレーションを行っているので、再度整理して後日報告する。

(濱田氏)

全体にミズゴケが生育するのではなく、部分的には乾燥した草本も生育するのか。

(矢部座長)

ミズゴケはボッグ湿原の一部と考えてほしい。

(岡部氏)

盛土材の泥炭土は現地発生土を使用するのか。それとも別の場所の泥炭土を使用するのか。

(事務局)

江別太遊水地の泥炭土を使用する予定である。

(松田氏)

遮水盛り土の効果が見られない場合等は、次の対応策は考えているか。

ちなみに、軟弱地盤なので盛り土が軽い泥炭であっても圧密沈下が生じると考えられる。この圧密沈下が生じることで、遮水盛土の下面を抜ける水の遮水効果が期待できるかもしれない。

(事務局)

沈下量は大きくないと考えている。遮水盛土の余盛りを行う以外の対応策は検討していない。

(矢部座長)

排水溝の埋め戻しを予定しているが、サロベツでも見られるように、埋め戻した部分だけ周囲と植生が異なることが考えられる。幾何学的な模様をつくらない方がよいと思うがどうか。

(松田氏)

自然再生なので、出来るだけ自然が再生されていくプロセスを観ることが出来るのが望ましいと思う。

(岡部氏)

あまり幾何学的に長方形にならるように留意することとし、あとは事務局にお任せしてよいのではないか。

2) 湿生植物の導入手法について

(木村氏より、今年度の育苗状況について報告)

- ・ 今年度取り組んだ種子採取、挿し木等の状況について報告する。
- ・ 育苗に関してこれまでの知見が多い種は、現地で種子や植物体を採取して、種蒔きや挿し木の養生を行っている(パターン①)。ゼンテイカ、カキツバタは発芽を確認している。エゾサワスゲ等のスゲ類は播種の時期が遅かったため、今年度は発芽有無の判断ができていない。次年度の春以降の判断になる。ハイイヌツゲ、イソツツジは挿し木で養生している。
- ・ 現地で種子を採取し、林業試験場の協力を得て組織培養した種の育成を行っている(パターン②)。美唄湿原等で採取されたホロムイイチゴの種子を組織培養で増殖し、2014年夏より育成している。一冬越して今年も育っている状況であり、一部は夕張川の現地に移植している。
- ・ 後期導入種(主にラン科植物)については、赤平オーキッドさんの協力を得て、無菌播種して培養する試行を行っている。これまで育てた経験が無いものが殆どであるが、トキソウは少量が発芽している状況である。コバノトンボソウは少量の発芽が見られるが、植物体も小さく量も少ないので、今年度の状況では増殖できるかどうか判断できない。
- ・ ミズゴケについても試行している。江別太遊水地の改変する箇所のミズゴケを避難してきて養生している。来年以降、様子を見ていく。

3) 幌向再生地の利活用について

(松田氏より、景観と地域利活用について報告)

- ・ 幌向再生地の景観、利活用を考えるにあたって、景観はどう認識されるかということについて少し解説する。
- ・ 景観は大きく分けて3つの評価の軸がある。①見た目の評価である視覚的評価、②使いやすい、居心地がよい等の身体的感覚評価、三つ目に今回ポイントになる、③意味

的理解・評価である。

- ・ 幌向再生地は③意味的理解が非常に大きいと言える。意味的理解なしに幌向の景観、観光、活動を考えるのは非常に難しい。意味的価値を理解してもらうため、情報発信が一番必要であり、さらに体験して学習してもらうことで、価値観を共有することが重要である。
- ・ 景観やまちづくりに与える効果は順を追って現れる。まず、①景観が整備された空間を理解・認知されることが重要である。そうすると印象が変わり、次に、②人の意識（親しみ、愛着、シンボル）が変わってくる。それが、③実際の活動（コミュニティの形成、イベント、維持管理）に現れてくる。①②がないと、③は実現しない。
- ・ この波及効果として、地域への経済効果、外部評価の高まり、地域ブランドに繋がることになる。
- ・ 一方、整備した効果には 2 種類の効果がある。一つは出来あがったモノによる効果、二つ目はプロセスの効果である。地域がみんなで幌向を良いものにしていくプロセスがあると、その効果が大きくなる。

(濱田氏)

フットパスを通じて地域の成り立ち等を説明しているが、一般の参加者には理解されにくい場合が多い。個別の団体だけで取り組むことは難しいが、多様な立場の参加者によるワークショップで議論する場ができたので今後が楽しみである。フットパス等に子どもたちの参加が少なく、担い手等の問題があるが、少しずつでも取り組んでいきたい。

(松田氏)

学校の教育プログラムに取り入れてもらうのがよい。学校の先生（特に理科の先生）や理科クラブ等のサークル活動を対象に、こちらから説明会等に出かけていけるとよい。学校側もそのような素材を探していると思う。いろいろな人が議論に参加できる場があってもよいのではないか。また、ワークショップを設立してから 3 年経過するので、シンポジウム等のオープンな議論の場があってもよい頃である。

(矢部座長)

今よりも話しやすい体制にするにはどうすればよいか。

(松田氏)

再生した湿原を地域で生かしていくには、ここのメンバー以外の人に議論に加わってもらう必要がある。自然再生の話と地域活動の話は別なので、これらを連携しながら進められる場があってもよいと思う。

(矢部座長)

南幌町では幌向再生地を資源として活用していく考えはあるか。

(尾暮氏)

本日は欠席しているが、教育委員会の浅野氏と相談した。幌向再生地の環境のことだけでなく、南幌町の開拓史、治水史等も含めて一般町民向けの社会教育に使えるのではないかと考えている。また、自然再生の取り組みを行っていることは、一般町民はもと

より役場内にも殆ど知られていない。HP 等を通じて広く PR するとともに、役場の関係部署にも情報提供を行い、利活用のアイデアを集めていきたい。

(矢部座長)

札幌開発建設部として、今後の体制についてどのように考えているか。

(岡部氏)

勉強会やシンポジウム等の開催に繋げていきたい。

(松田氏)

地域のことは地域が取り組んだ方がよい。全体として一つの取り組みの中で、地域での生かし方の部分は地域主体の枠組みがあって、その中に行政が加わる体制がよいと思う。

(矢部座長)

両者が噛み合わない状況にならないよう、十分に調整して摺り合わせていくことが必要である。

4) その他

(榎井氏)

本日の資料には、略称として「幌向再生ワークショップ」と記されているが、規約にもそのように記載した方がよいのではないか。第1条の（以下、「ワークショップ」という）を（以下、「幌向再生ワークショップ」という）としてはどうか。

(矢部座長)

是非、そのようにしていただきたい。

(事務局)

木村氏のご報告にあったように、ラン科植物の組織培養等には赤平オーキッドさんの協力が不可欠となっている。今後は、オブザーバーとして参加していただき、メンバーリストにも加えたいと思うがどうか。

(メンバー一同)

異論なし

3. 閉会

以上